

東日本大震災と「心の花」⑤

藤島秀憲

東日本大震災以来、「心の花」誌上に震災の歌を一番多く寄せているのは岩手県在住の山口明子であろう。二月号の作品評では鈴木陽美が山口について次のように書いています。

「心の花賞受賞作『さくらあやふく』以後確かな技量で積極的に震災をテーマに作品を発表し続けている作者。今月の一連も岩手在住の当事者にしか詠えない現場性にあふれていた。」

・何が起きてゐるかわからぬ闇の夜のラヂオが告ぐる増えゆく死者を
山口 明子(十一月号)

・本箱が本を吐き出す部屋の中化粧水濃く瞬時にほふ
・帰り来し夫の背中に触れむとす三月十一日のゆふぐれ

一首目が「今月の一連」の歌、二首目と三首目が「さくらあやふく」の作品。鈴木氏の批評に付け加えれば、視覚だけでなく、聴覚・嗅覚・触覚を使った歌に、現場性を強く感じる。視覚だけで捉えた歌は被災地で生で見ていることと、テレビで見ていることとの差が生じにくいので、現場の実感がどうしても薄くなりがちである。現場性とはつまり、肉体で感じ取るリアリティーだ。

山口の作品の現場性を評価した鈴木もまた、東京都在住の当事者にしか詠えない現場性にあふれた歌を作っている。

・風景にみどりの色が抜けている 暮らしのすべてが破片となつて
鈴木 陽美(六月号)

・携帯の電池の切れるを怖れつつホテルのロビーに一夜明かしぬ

一首目は新聞の写真を見ての歌であろう。人間らしい暮らしの要素を木々や水田をイメージさせる「みどりの色」として捉えているところが独自。メディアの情報をそのまま受け取らずに、作者固有のフィルターを通してことで、当事者にしか詠えない現場性と同じ効果が生まれた。二首目、帰宅難民の一人になった作者が怖れたのは食事でも水でもなく、携帯電話の電池切れであったことが、今という時代を映し出している。一方で家族と知人の安否を確かめようとするのは時代を超えた心理である。

大切なのは被災者であるかではない。被災者からの距離ではない。あらゆる感覚を駆使すること、自分なりのフィルターを持つこと。被災地だけが現場ではなく、現場は国内外を問わず至る所にあつた、いや、現場は今も残り続けるはずだ。

・大地震から三ヶ月もぐらは畑へもどり天井裏のねずみはもどらず
橋本 英子(二月号)

・犠牲者にクラスメートの名は見えず石巻中卒後七十五年
伊藤 長門(二月号)

福島県在住の橋本は欠詠もあるが震災後の日々を淡々と詠み続けている一人。(三週間同じ服を着ておりぬ夢ではないか)と目覚めても夢にはあらず 七月号)。伊藤は神奈川県在住、中卒後七十五年も経てば震災時に生存していたクラスメートは少なかつただろうが、だからいっそう故郷を思うのである。被災地から離れてはいても、伊藤にしか詠い得ない現場からの歌である。

締切が十一月二十五日であつた「心の花」二月号に、震災や原発事故の歌は極めて少ない。うたうべきことが既にうたい尽くされてしまったのだろうか。短歌のテーマとしての鮮度が既に失せてしまったのだろうか。